

薬学部・薬学研究科

I	研究水準	研究 8-2
II	質の向上度	研究 8-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 16 年度から平成 18 年度における本務教員の発表論文数は一名当たり毎年 4 件程度であり、特許出願数も 14 件～20 件と年々伸びている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の内定金額（間接経費を含む）が平成 19 年度は計 1 億 7,400 万円で、教員一名当たり平均 320 万円、また、競争的外部資金の受入れ金額は 1 億 8,800 万円で、教員一名当たり 350 万円の助成を受けている（資料 A1-2007 データ分析集:No.24 科研費申請・内定状況及び No.26 競争的外部資金の内定状況）ことは、優れた成果である。

以上の点について、薬学部・薬学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、薬学部・薬学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、先端的な研究成果が生まれている。卓越した研究成果として、例えば、世界で初めて γ -ルブロマイシンの全合成を成功させ、新しい作用機構を持つ抗がん剤の開発研究につながる可能性のある研究、また、神経ペプチド PACAP と受容体 PAC 1 の一塩基多型関連研究で、PACAP が統合失調症リスク因子であるこ

とを発見した国際的に高い評価の研究が生まれている。また、過去4年間の研究成果によって、国内学会賞3件等を受賞している。社会、経済、文化面では、研究成果に基づいて、特許出願（平成16年は14件、平成17年は16件、平成18年は20件）したり、企業との共同研究を積極的に進めたりするなど、社会、経済の発展に資する活動を展開していることが、優れた成果である。

以上の点について、薬学部・薬学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、薬学部・薬学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が1件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が4件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。